くのことを学びとることができた。いくつか例をあげると、山田氏の報告では、東京都の「改革」の「ルーツ」が、私の生まれた1980年頃から始まっていたということに、その問題の根深さを知ることができた。また、教員養成に関心のある私にとって、「東京教師養成塾」は、戦後日本の教員養成制度の二大原則とされる「大学における教員養成」と「開放制」の根幹を揺るがす問題であるということを再認識させられた。そして、それと同時に「東京教師養成塾」や「東京未来塾」に東京都の「改革」の性格の一面を垣間見ることができたように思う。

来年の合宿研究会にも多くの参加者が集まり、今後の技術・職業教育に関する討論がなされることを期待している。ぜひ来年も合宿研究会に参加したいと思う。

(東京学芸大学大学院生)

教育研究全国集会(全教)参加記

# 地域と高校職業教育

佐々木　　享

去る1月11日から13日まで、長野市における2003年度教育研究全国集会の技術・職業教育分科会に傍聴者として参加した。レポートは、高校から14本、中学校から2本である。以下、そのいくつかについて、順序不同に感想を記す。

### 技術科、工業関係の報告

京都(荻野和俊氏)は、工業高校定時制における『PICマイコンで学ぶ情報技術』の実践を報告した。せっかく組み立ててもハンダ付けが不完全なばかりに作動しないことが少なくないとのこと。技術の世界の要点だと感じた。

長野(中野実業高校)の報告は、機械部の生徒たちが自力で工夫を凝らしてエコノパワー燃費競技大会などに取り組んだ実践で、生徒たちが報告し質問に答えていたことに好感がもたれた。この種の競技では速さなどを競うこともとにかく、生徒たち自身が技術の世界で工夫するところに要点があるとの司会者からの補足があり、面白い世界だと感じた。

今次集会では、地域との関連に着目したレポートの多いことが注目された。後述の農業高校だけでなく、兵庫(神戸市立長田工業高校定時制・中西雅彦氏)の報告もその一つで、「卒業に当たり社会に、学校で習った技術を生かし、記念になるものを社会に残したい」という趣旨で、1968年以来長年にわたって生徒たち有志が遊具を製作し、地域の幼稚園に寄付しつづけ、地域からも感謝されているという実践である。

私学(千葉敬愛学園・加倉井砂男氏)からは、建築科と家庭科との融合学習としての建築計画に関する実践が報告された。秋田(北川智彦氏)と大阪(前野博氏)は、高校の再編・縮小の動きのなかで工業高校が縮小される動きとその問題点について報告した。

長野(藤本功氏)からは、県下職業高校における資格・技能検定取得をめざす取り組みの実態が報告された。それなしには就業制限を伴う公的職業資格と民間団体(校長協会を含む)が設定している技能検定との区別が曖昧にされていることには問題が感じられた。

なお、技術科分散会に出席しなかったので、埼玉の直江貞夫氏の『技術科のものづくりに

おける技能』に関する報告をくわしく聴くことが出来なかったのは残念だった。

### 学校災害を考える

広島（石原忍氏）は、中学校技術科の半学級編制の授業が減少していると報告した。広島県にだけ技術科の半学級編制の授業が多い歴史的な背景が知られていないようだったので、わたくしは、1962年に広島県三次市の中学校技術科の授業で生徒が指を切断した事故があり、劣悪な教育条件を怒った父親が損害賠償請求裁判を起こしたことを直接の契機として同県の技術科に半学級編制授業が広まった経過を補足し、この事故については原正敏先生とわたくしの共著『技術教育と災害問題』(1966年、国土社）があり、この判決については『ジュリスト特集　教育判例百選』（有斐閣）に判例批評があると補足した。

ところで帰宅後の19日、1月13日に強風にあおられて倒れた校庭のサッカーゴールの鉄製支柱に頭を強打して中学生が死亡した事件で、責任を感じた校長が自殺したと新聞に報じられた。実は数こそ少ないがこの種の死亡事故はこれまでもあり、支柱を固定するとともに布などを巻き付ける必要があることが指摘されていた。学校の安全管理をめぐる経験をきちんと蓄積し伝達することの重要さを痛感した。

### 高校職業教育と地域

『上農牛で上伊那を救う』と題した長野（上伊那農業高校・境久雄氏）の報告は、生徒自身が報告した。同校には血統の優れた優良な黒毛和牛がいるので、地域酪農家に不足している優良受精卵を供給したいと研究してきたが、受精卵回収・移植には多くの費用がかかりかつ高度な技術的を要する。そこでJA上伊那の技術者と相談し、JA上伊那、伊那家畜保健衛生所、上伊那郡下酪農家、上伊那獣医師会などの協力を得て、4年前から試験的に取り組んだ結果、実質13頭、のべ40頭の学校の優良ドナー牛から296個の良い卵がとれ、これを30戸の酪農家で移植したところ、受胎率45％ですでに50頭が産まれた、よい値も付いているので今後も引き続き努力したいと考えている、などという実践である。

『農家に学び、地域に学ぶ』と題した新潟（村上桜ヶ丘高校・内山雄平氏）の報告は、酒の醸造元の人から地元の女川のコメがおいしいと言われていることに着目し、生徒たちが農業改良普及センターの協力を得て、土壌、気温変化などの背景とともに、コメの成分を調査分析し、その結果を地元の農家に持ち寄り、一緒に研究してきたという。

農業についてはこのほか山口（宇部西高校・森山文夫氏）から、持続型農業をめざす有機栽培に取り組んだ元気な実践が報告されたことをつけ加えておく。

和歌山（新宮商業・丹下善夫氏）からは、「課題研究」の授業として地域の商店街にネットショップを立ち上げた実践が、北海道（奈井江商業・佐藤琢磨氏）からは、生徒たちが協議を重ねながら、地元に商店を出して商業活動を実践的に学んだことが報告された。

今次集会には島根（隠岐水産高校・村上一氏）から『海を愛し、海を拓け』と題した多数の女生徒をふくむ「水産基礎実習」の実践が報告された。島根県からの報告は珍しいし、この分科会に水産高校からの報告は滅多にないので特筆しておく。

### 農業高校による地域の先端を行く飼料稲の研究――全農研の集いから

12日夜は「全農研（全国農業教育研究会）の集い」に参加し、短時間だったが3本の報告を聴いた。その一つは、『飼料稲の研究で学校が地域農業を一歩リードする』と題して「学校作り」分科会へ提出した兵庫（氷上農業高校・藤原和正氏）の報告である。

世界の三大穀物（麦、とうもろこし、稲）のうち動物飼料として用いられないのは稲だけ

だそうである。同校の教師は生徒たちとともに県の農業技術センターを訪ねてアドバイスをもらい、飼料の自給率向上と安全な飼料生産をめざして稲を飼料作物として直播栽培したところ、ある程度成功した。つづいて稲発酵粗飼料を作り、牛への給与試験、稲発酵粗飼料の栄養価値と畜産経営面での効果を分析し、地域の農民たちに報告したところ、地域から注目されている、という実践である。技術的には通常の稲作とは異なる配慮が必要らしいが、農業高校から新しい試みが生まれ、地域に影響を与えているとは驚きいった。

**タクシーに「2003年度教育研究全国集会歓迎」のステッカー**

ところで、駅前からタクシーに乗った際、クルマの脇腹に貼られた「歓迎　2003年度教育研究全国集会」というステッカーに気づいた。教育研究全国集会には随分たくさん参加したが、初めてのことで感激した。地元長野高教組の行き届いた気配りと努力の反映だったに違いない。すばらしい実践報告、分科会会場に向かう途中の犀川の堤防から眺めた朝の山並みの稜線の美しさとともにすがすかしい思い出になった。　（元技教研代表委員）